

第4回 魅力ある府立高校づくり懇話会 (概要)

1 日 時

令和5年1月24日(火) 午前10時～正午

2 場 所

京都産業大学むすびわざ館 3-A (3階)

3 出席者

- 委員 11名(欠席1名)
- 教育委員会 前川教育長、木上教育次長、村山教育監、大路管理部長、吉村指導部長、村田指導部理事、相馬高校改革推進室長、片又高校改革推進室参事 他

4 概 要

- 事務局からの説明
 - 意見交換
-
-

■事務局からの説明

■意見交換(主な意見)

◆：座長 ○：委員 □：教育委員会

- ◆全日制課程における学科の役割や望ましい配置について、特に職業学科や総合学科を中心に御意見をいただきたい。
- 高校段階での、職業教育、キャリア教育に最も求められることは、トライアンドエラーをたくさん経験して自分の職業適性を具体的に見つけていくことではないか。職業適性は大学の学科選択の段階では考えると思うが、それでは少し遅い気がする。また、普通科の生徒が多く、できるだけ偏差値の高い大学を選ぶ傾向で、自分の職業適性を考えて大学進学をしている人は少数派だとも思う。その結果、自分の方向性や適性を考えることのない就職活動に流れ込んでいき、ミスマッチを起こして早期離職をするという流れが以前から繰り返されており、その流れは拡大傾向ではないかと思う。大学まで進んでからでは、やり直しが難しい。具体的な職業適性を一番見定める時期が、まさに高校生ではないだろうか。
- 高校を卒業して専門学校へ進んだが、入学してから適性がなかったことに気が付いて脱落するというケースは珍しくない。そういうことが高校の職業学科でも起きるのではないか。専門性の高い職業学科にかぎらず、総合学科や他の学科でも、トライアンドエラーの結果、修正して次に進めるように、複数の道筋を用意することが、高校においてはできるのではないか。
- 職業学科の役割は、その分野の職業に関して徹底的に具体的な現実と求められる要件を提示することである。職業学科を選択している生徒は、自分の夢や目標をある程度見つけている。だ

から、職業学科におけるトライアンドエラーには具体性があると思う。

- 府立学校には様々な特色のある職業学科を持つ学校が多く存在する。全国から生徒が来ている学校、充実した設備のもと専門的な授業を行っている学校、目的を持って教育を行っている学校など様々ある。しかし、生徒募集面では厳しい状況がある。高校ではとりあえず普通科を選択して大学に進み、自分の将来を決めようという考え方が、根強く残っているのではないか。中学生段階で、将来の目標や方向性について目的意識を持っている生徒は、少ないと感じている。
- 中学校教員は、職業学科の教育内容をあまり理解していない中で、生徒の成績で、普通科を勧めることが多いのではないか。中学校教員を対象とした、職業学科の教育内容が体験できる取組を行っている学校がある。そうした取組を通じて、中学校教員の高校理解を深め、ひいては中学生の理解に繋げていくことが大切である。
- 職業学科がある学校の特色として、寮を持っていることは魅力づくりのひとつになっている。たとえば海洋高校は京都市内や他府県などからの入学生が多く、寮の存在が必要である。寮生活を通じて身につけられる社会性は、教育的に大きな意義がある。
- 職業学科の議論においては、本当に難しい部分が多いと思っている。専門教育として大切な学びができる学科であることは間違いないが、人気が少ないという現状がある。専門的な学びを進めていくことに対して、狭い道筋を進んでいくというイメージが、入学前の中学生にはあるのではないか。狭い道に入って、もしそこで自分の思いとうまく合わなければどうしようという不安から、敬遠してしまうのではないか。
- 高校教育段階での探究的な学びの先駆けは、職業系の専門学科である。たとえば、農業科であれば、地域の農家の方々と協働する体験もでき、その素晴らしい経験が将来に繋がっていくと思う。しかし、府全体においての職業学科の設置や在り方については、難しい課題である。現状として、職業学科で学んだ先の将来の道筋が見えにくいところもある。高大連携は多くの職業学科で進めているが、産業界との連携については、商業科や工業科ではうまくできていないのではないか。実務的にレベルの高い資格が取れたとしても、それが実際の社会で働く中で生かされているのだろうか。本来は理論的な大きな学びが地域に還元されて、その職業専門分野で次代を担うような役割を持つてくれることが理想だが、そのためにはさらに大学で学びを深める必要があるとも思う。さらに、大学卒業後にどのような職業に就いて、どのような役割が与えられるかというところまで、イメージすることはなかなか難しい。職業学科については、量的に多く設置するというよりも、たとえば工業高校や京都すばる高校など、センター機能的な役割を持つ各職業学科の高校が、高校段階での高いレベルの教育内容や実践を発信して、それをサテライトの形で同じような学科やコースのある学校と連携するようなことも考えられるのではないか。コンソーシアムのような形で連携していくことも考えられる。
- ◆職業学科の生徒たちが大学に進んだとして、大切なのはその先の将来を見通すことである。地

域産業と連携し、就職も見据えたキャリア教育で、自身のキャリアアップをどのように展開させていくことができるかというビジョンが描けることではじめて、大学進学やその先の就職が見えてくるのではないか。

- ◆府内の地域それぞれに伝統産業がある。これまでから職業学科等には、地域人材を養成するという大きな社会的役割もあったと思う。それについての議論も必要である。
- 中学校でのキャリア教育の課題であるとも思うが、中学生の段階では将来がなかなか描けていない。中学3年生に対して高校入試に向けた模擬面接で、「将来の夢は何かありますか」という質問をすると、「今はまだない」、「高校3年間で将来やりたいことを探したい」という生徒がかなり多い。もしくは、「何か社会の役に立つような仕事に就きたい。具体的にはまだ決まっていないが、そのために、大学まで行ってしっかりと勉強したい」という回答をする生徒もいる。高校でというよりは、大学まで進んでから自分の適性を探したいという意識を、中学3年生の段階では持っている。自分の適性について、まだそこまで考えていないとも言える実態なので、高校進学において職業学科を選ぶということは、なかなかできないのではないか。
- 中学生は、職業学科の高校生が実際にどのような学習をしているのかという実態を知らないと思う。近隣の高校の職業学科が出前授業を行っている中学校では、当該学科に対して毎年一定数の進学希望者がいる。職業学科で学ぶ高校生との交流を通じて、実際の学習内容が中学生に対してリアルに伝わることで、自分もそうした学習がしてみたいと考える生徒が現れてくる。職業学科の学習のリアルな内容を知ることができる機会があれば、希望者も増えてくるのではないか。
- 「とりあえず高校に入って、大学に進んで、そこから」と考えている中学生が多い傾向は、10年以上前から変わっていないと思っている。そうした中学生たちに、どのように具体性を持った進路指導やキャリア教育を施していくのかということは、中学校での大きな課題である。高校生の出前講義などを通して興味を持ち、地域の高校の職業学科に進学する中学生も多い。府内では地元地域に対する意識が強いので、どれだけ地域社会と繋がっていくかという要素は、非常に重要である。
- 子どもたちにどれだけ目的意識を持たせるかが、大きな課題である。そのためには、高校側がもっと踏み込んで子どもたちに具体的にアピールすることが必要であり、職業学科には特に求められていることだと思う。職業学科に入ることで、どのような大学や専門学科に進学できるのか、どのような就職に繋がるのかなど、3年間学んだ先の具体的な姿を、しっかりと示していく必要がある。
- ◆中学生はリアルな情報や体験を求めているようだ。高校のカリキュラムや指導内容が小・中学生に届けば、もっとしっかりとしたイメージが持てるのかもしれない。「地元」という言葉も非常に重要なポイントである。それぞれの地域にそれぞれの産業や職業を支える高校が一定数存在しないと、「地元」というキーワードに込めていくことができないのかもしれない。

- 職業学科は特に保護者に対するアピールが必要だと思う。中学校教員や保護者を対象に、学校紹介ではなく、地域産業との繋がりや、その職業分野において「こういう学びが非常に有効になる」というような説明会をしてはどうか。高校での学びと社会の繋がりを研究し合う勉強会のような場を、保護者を教育するというような観点も持ちながら、高校主体で設定できないだろうか。興味を持って農業に取り組んでいる子どもに対して、その保護者が農業での先行きを案じ、「パソコンなどの就職に役立つことを勉強しろ」と言った事例がある。本質的な職業についての理解が甘い保護者もいることも踏まえるべきであり、保護者に対するアピールは非常に重要である。
- 保護者としては率直に、子どもは普通に育ってほしいという思いがある。社会の実態として、高校卒業で就職すると、給料が安くなってしまう。実際の社会はまだまだ学歴偏重で、大学卒の方が給料がよいという常識が、保護者の念頭にはある。職業学科や総合学科で学んで、社会で通じる能力をつけた生徒たちが、実際の社会で評価されて見合った給料がもらえるような構造であれば、保護者としても勧められるが、実態はそうではない。社会は急激に変化しているが、苦勞はできることならさせたくないと思う。また、塾でも進学実績の高い普通科等の高校を勧められる実状がある。
- 職業適性に関わるトライアンドエラーでは、経済的な負担がかかることもあり、大きな選択になる。小さなトライアンドエラーを積み重ねさせるのはどうか。たとえば、中学校段階から、校則や制服などについて、自分たちで主体的に考える機会を与えていく。その時々に応じて、自分たちにふさわしいことは何なのか、自分らしくあるためにはどうすればよいのか、自分は何が好きなのかということを考え、保護者も共にトライアンドエラーしていくことが有効ではないか。保護者にとってもチャレンジであるが、身近な大人の考えや振る舞いを、子どもたちは見ていると思う。
- 現状として、府内全域に職業学科が多数設置されていることが、あまり知られていないのではないか。工業科に通う生徒を持つ保護者が、地域の企業に生徒の就職が決まり、「地域に残ってくれる若者が増えるのは嬉しい」と言っていた。このように地域を支えるような素晴らしい学校が多くあることを、中学校教員は知っていて、生徒たちに勧めているのだろうか。保護者には職業学科や総合学科の情報があまり届いていないと感じている。
- 中学校1年生の段階から、どのような高校があつて、どのような教育内容で、将来どのようなことに繋がるのかという説明会などが、生徒と保護者両方に対してあるべきだと思う。そのときには興味がわかenかったとしても、高校選択のときに改めて思い出すこともあるかもしれない。中学生は本当に日々の学校生活に一生懸命になり、将来への意識については個人差が大きいと思う。保護者の意識改革も必要である。少子化が進んでおり、社会も大きく変化しているので、学歴だけでなく実力が重要になっていくのではないかとも思う。
- 北部地域では以前から、即戦力として職業学科で専門性を高めた生徒たちが、地元の企業に就

職したり、地元で農業や商業を行ったりするなど、地域社会に対して職業学科の果たしてきた役割は大きく、今後も重要な部分であると考えている。しかし、生徒が集まらないという現状がある。高校側のPRにも課題はあるが、小・中学校での教育の不十分さもある。「とりあえず普通科に」と家庭で考えてしまう中で、中学校もその意向に沿った進路指導をしてしまい、生徒本人が意識を持ってなくなっているのではないか。学校現場では、「進路指導」といって指導する時代ではない。「進路相談」という形で、どのように生徒を支援しながら、職業的な自立を考えさせていくのかというのが、小・中学校のキャリア教育の視点としては重要である。小・中学校の総合的な学習の時間で、地域の産業等を学び、愛着を持ちながら、地域の課題や将来性をどう理解していくかが大切である。その上で、学力の一側面である知識の量だけでの高校選択から脱却していけるような、中学校での進路相談とともに、高校の魅力向上が必要だと考える。

- 生徒数が減少し、5年後、10年後には今の9割、8割程度の水準になるという現状を思うと、これまでは総合制の高校の在り方は京都府の特色として機能してきたが、今の時代には合わなくなってきたのかもしれない。様々な職業学科の生徒が、学科の枠を超えていろいろと刺激を受け合いながら学んでいく意義を考えると、総合型の専門学科高校のようなことも考えられるのではないか。
- 北部地域では、市や町が地域コーディネーターを配置している例がある。たとえば京丹後市では、地域学校協働本部事業として各旧町に地域コーディネーターを配置し、キャリア教育の視点も持って小・中学校の学びと地域産業とを繋いでいる。さらに府立高校に対しては、各校に1人ずつ地域コーディネーターを配置し、従来の学校教育の視点だけではない多角的な視点により、総合的な探究の時間等を通じて、高校生と多様な地域資源とを繋いでいる。こうした取組については、非常に有効である。
- 職業学科に進んで失敗したらどうしようという不安に基づいて、とりあえず普通科を選んでいるのであれば、職業学科においても普通科とかわりなく大学進学が実現できるという流れができればよいのではないか。それは特に難しいことではないと思う。大学入試の現状を踏まえると、職業学科においても一般的な大学への進学は十分対応可能である。それを周知することやカリキュラムの改善を進めていくべきである。
- これまでの議論にあった、生徒の多様性が拡大する中での柔軟性を持った新しいタイプの高校の在り方の話と、今回の専門教育・職業学科の在り方の話は、トータルに府立高校全体をどうしていくのかという観点で考えていく必要がある。高校の機能や役割などをとがらせる視点としては、多様性を包摂することでの共生、そしてカリキュラムの柔軟化といったことに実験的に取り組み、普通科などにも波及させていくという考え方が1つあった。もう1つ、PBLや探究学習、STEAM教育やDXなど、徹底的に社会との繋がりを追求するという視点では、その最先端に行くのが専門教育を施す職業学科ということになると思う。
- 現状の職業学科を見ていると、「即戦力スキル訓練」というような要素が強いのだと思う。そ

のような教育では、全体の枠組みをつくっていくような人材育成には繋がりがなく、流動化する時代においては大きなリスクを背負ってしまう。逆に普通科では、school to schoolばかりを意識している。学校から仕事へどのように移行するのか、社会とその全体が見つめられておらず、school to work の以降の問題が根本にある。専門教育を施す職業学科の一番のメリットは、実際の社会をしっかりと見据えて学ぶことができるということである。だから、スキル訓練・職業訓練的な職業学科でなく、しっかりとコンピテンシーを育てていくようにしていくことが非常に大切である。スキルからコンピテンシーへということはよく言われており、コンピテンシーは汎用性のあるものである。コンピテンシーの育成の核心は「〇〇力」ではない。実際の社会をしっかりと見つめることが大事である。具体的に現在の社会はどのようなかということ、農業科なら農業という分野を通してしっかりと見据えていくことが求められる。

- 職業学科の高校が、その地域や社会の最先端を担う、未来を感じさせる場として、地域社会や保護者などを巻き込んでいくという方向性が重要だと考える。戦後間もない頃、学校は民主主義の最先端だと言われ、未来を感じさせる場であった。今は逆に、学校は時代遅れのように言われるが、職業学科は未来を感じさせる場になりうる。ポテンシャルをもともと持っており、それに気づくことが必要である。従来から職業学科では、課題発見・解決型の学習に取り組んできたはずであるが、それが形骸化しているのではないか。
- コンソーシアムについては、商業・農業・工業など、それぞれの分野だけで閉じずに、もっと横断的に考える方がよい。例えば、工業のもの作りの発想と商業のマーケティングの発想とは異なる要素があるので、工業と商業が一緒になると全然違う視点が得られて、ビジネスチャンスが見えてくるということにも繋がる。そうした考え方では、総合型の専門学科高校という発想もありだと思う。ただし、専門科目のビュッフェ形式のような、単なる寄せ集めに陥ってしまっただけではない。専門性をしっかりと際立たせた上で横断させていく形が重要である。
- 職業学科間での横断や、複数の高校や社会を巻き込んだコンソーシアム化ということでは、広島県の高校改革での事例がある。いわゆる名門校と言われる高校を中心としたWWLの体制の中に、職業学科の高校も入っており、探究学習の内容では、普通科でのものよりも興味深いものがある。また、資料2の水産科のある高校に関しては、若狭高校が福井県の中でも探究的な学びの先進校であり、全国的にも非常に有名である。探究学習を前面に打ち出せるのは、水産科があるからである。職業学科を活用してしっかりと探究学習をすることは、一般教育にも繋がってくるし、まさに汎用性を持たせることになる。職業学科があることの強みを、もっと追求していった方がよい。職業学科と普通科の生徒が協働したときに、普通科の生徒たちが「自分たちはまだまだ駄目だ」というような刺激を受ける。それくらいのポテンシャルが、実は職業学科にはある。しかもそれを生徒たち自身が対外的に、勉強会や発表会などを組織してやっていくということまでできれば、自分たちで社会について学んでいるという感覚にもなっていく。
- 変化する社会への一番の備えは、少し先を見通すことだと思う。中学校・高校段階で、学校が気づかない間に、自発的に学校の外側で社会と繋がっている生徒が多くいる。school to work

でいうと、実際は大人たちが知らないところで様々な繋がりが生まれ始めている。だからそこにしっかりと光を当てて、潜在的なニーズをきっちりと掘り起こしていく戦略があれば、もっとも職業学科が光り輝いてくるし、高校全体を牽引していく存在にもなり得るのではないか。

- 職業学科に閉塞感があると思われるのは、大卒学歴やその先の出口が見えないからではないか。これが日本の最大のネックでもある。ヨーロッパ圏における分岐型学校体系では、後期中等教育、高等教育の段階において、職業教育からのルートができていく。マイスター制のようなものに繋がっていく伝統があるので、高校での職業教育の後に、高等教育レベルに近い学びの場が保障され、仕事に就いてからも一定のステータスが保障される可能性がある。しかし日本の場合、偏差値において低位という位置づけが払拭されない。なぜかという、その出口がないからである。つまり、school to workの問題をどのように組織化するか、ここにどうメスが入るかということが、一番のポイントである。
- 学歴は生涯においてやはり一定の意味を持つてしまうが、「学校歴」は別である。一定の学歴を持ちながら、それにプラスして「実力」があれば、これほど強いものはない。大学卒といった学歴の効用は確実にあるので、それをしっかりと保障しつつ、広げながらかつ「実力」をしっかりとつけていく。そういうカリキュラムを組んでいくことが重要である。現在は大学の方が選ばれる側であり、様々な推薦枠も広がっているので、それらを活かすこともよい。加えて、今後は高校段階から起業をすとか、社会と繋がりを持つなどの並行キャリアも考えられる。「学びつつ働く」というキャリアイメージができると、かなり魅力的になってくるのではないか。
- 専門教育の出口の課題では、たとえば工業科で、「旋盤加工でこんなものを作りました」というのはすごいことなのだが、即戦力の育成やもの作りに特化した教育だけでは、生徒たちは全体の枠組みをつくる人材にはならない。そのイメージを大転換していくことが必要ではないだろうか。農業などは特にこれからの成長産業であり、バイオやデータと繋がれば、非常に大きな可能性がある分野である。そうした可能性を教員もあまり知らないのではないか。だから学校と産業界とが一緒に勉強をしようというレベルから進めていくことが重要だと考える。
- ◆府立高校では、様々なネットワークをしっかりと組んでいくことがポイントとなってくるのではないか。学校間では、学舎制などで組み始めている部分もあるが、委員から紹介のあった広島県や福井県の先端事例も参考にすればよいのではないか。
- 農業教育学会の大会で、オンラインでの高校生ポスター発表を見る機会があった。高校生たちの学びの成果がわかるものであったし、研究者の専門の立場からの質問に、生徒たちが一生懸命答えていた。高校生が大学教員と繋がる機会が非常に大事だと感じた。生徒自身の興味・関心をもとにした研究の発表であるが、その先の産業や大学教員との繋がりなど、生徒たちにとっては、非常に有効だったのではないか。

○地域によっては、地元の企業が出前授業をしていることや、職業学科の高校生のインターンシップを受け入れていることについて、企業として広報紙を配布されている。企業側も、人材を育てようという思いや動きが強くなっている。職業学科の学びは、大学の研究にも繋がるし、地元の企業など、仕事と繋がっていくことにも開かれている。その可能性を、中学生にもしっかりと伝えていくとよいのではないか。農業の持つ可能性が非常に高いことなどを、中学校教員は意識していないと思う。職業学科で学ぶ領域の将来性といったものを、小・中学校や保護者が子どもたちに語っていくことが、職業学科の魅力になっていくのではないか。

□京都府の場合、職業学科については、学力的な面でとらえると普通科のセーフティネットのような立ち位置とされていたこと、そして大学進学志向が非常に高く、社会構造上も大学に進んでから就職をすることが幸せな人生に繋がるという日本人の価値観といった背景の中で、特異な位置にあったと感じている。これからの社会では、東京一極集中や都市への人口集中といった社会的な課題を解決していくために、教育としてはどう関わっていけるかが、重要な社会課題になってくる。その地域や社会を維持していくための教育、そこには理念だけでは生徒や保護者の支持を当然得られないので、将来を見据えた教育をしっかりとしていくことが、これからの職業学科の在り方に関しては重要である。

□総合型の専門学科高校という提案に関しては、1つの学校に工業、農業、商業などのそれぞれの施設・設備を全て揃えられるのか、どのような立地条件ならば生徒が集まるのかといった課題がある。総合学科においても、全国的にも成功事例は大規模の都市型のものに多いように思う。京都府ではそういった環境にない中で、どのようなことが考えられるか。横断的なあるいは複数の職業学科の学びができる教育の可能性について、探っていくことが必要であると考えている。

□今後の検討においては、府立高校で圧倒的に多数を占めるのは普通科であるということを念頭に置く必要がある。職業学科の学びの在り方を踏まえて、普通科の在り方をどのように考えていくか。たとえば、普通科の中に職業学科的な学びを入れていくことはできないのか、総合学科は難しくても、そういった要素や視点は検討していけるのではないかとも思う。大変様々な御示唆をいただいて、これからの検討・整理とはなるが、後半の議論の中にはそういった観点も加えていただきたい。

◆府立高校では、かつてⅠ類・Ⅱ類といったカテゴリーの階層性があり、学力伸張を特色としたⅡ類の生徒たちのアドバンテージが、逆にⅠ類の生徒たちのしんどさのようなものへ繋がりがかねないという実態もあった。そうした過去も踏まえると、1つの学校の中に普通科と職業学科を併設する場合も留意することが必要である。たとえば、同じ問題で学力テストをやって、点数面などの単純なカテゴリーだけで分類をすると、いわゆる学力下位というようなカテゴリーがなされてしまうことで、学びをよりよく進められない生徒も出てくることになるだろう。ここを払拭できれば、学力的にアドバンテージな生徒と職業教育を真剣に学んでいる生徒などをうまくリンクさせることができるのではないか。そのために、職業学科の選抜の在り方も含めながら考えていくことで、非常に融合的な府立高校らしいカリキュラムが提供できるかもし

れない。これは、府教委だけで閉じられない議論でもあるので、そういったことも含めた議論を、委員としては心がけていかないといけない。

◆次回の中心論点になる地域の実情を踏まえた府立高校の在り方について、学校規模や学校数などの要素も絡めながら、御意見をいただきたい。

○京都府は地理的に南北に長く、地域事情も大きく異なる。特に北部地域などでは、町の中での若者といえば高校生が主役であった。高校卒業とともに一旦多くの高校生が外へ学びに出て行くが、地元に戻ってきて働くUターン組がいて、地元地域の方はそこに非常に期待していると思う。京都市内などと中丹・丹後地域などでは、高校の学びに対して地域が求めている役割や要求などがそれぞれ違っている。

○急激に中学生が減る中、職業学科の検討においても、様々な学びを共有するための学校間連携や、中心的な学校からのオンライン配信といった考え方がある。しかし、対面で日々の学びを一緒にする、学校生活を共にする中で得られるものが非常に多いということは変わりなく、一律的に生徒数が減ったから学校数を減らしていくということだけではいけない。学校生活を共にする中で様々な経験が積めるという要素を大事にしながら、学校の再編等を考えていかなければならないと思う。

○総合学科については個別最適の考え方がある。生徒たちの様々なニーズを細分化し、自分でカリキュラムを組んで自由に学んでよい、少人数でも開講するという形を目指すものである。総合学科が多く設置されていないことの1つの理由は、学校運営が難しいことにある。カリキュラムを設定するのも授業を組むのも大変である。学校現場の感覚では、1人しか希望する生徒がいなくてもその科目の講座をはたして開講するのか、またそのような科目が多くなってくると、教員体制などから運営は難しい。京都府内全体での生徒の多様なニーズに、オンラインを活用するというのも1つの方法であり、一方では対面で共に学ぶということの重要性もある。それらをどう両立させるかが、今後のポイントだと考える。

○総合学科は、中学生にとって中身や魅力などが見えにくいのではないかと。教育内容を専門教育のように深く掘り下げるわけではないため、一見して広く浅く学ぶという印象があり、少し中途半端に見えてしまうのではないかと。STEAM教育については、工業科での学びが一番近い要素を含んでいるのではないかと。そのあたりを軸にした府立高校の繋がり、掛け算が考えられないかと。普通科に工業を掛け合わせるとか、農業の機械化と工業科を結び付けるなどである。そのように特化したものと結び付けないと、中学生からは学びの内容が中途半端に見えてしまう。

○中学生には、高校3年間での学びの中身とともに、その先の出口にどう繋がっていくのかということを示していかないといけない。農業、工業、商業など、何かに特化するということは大事な部分だと思っている。総合学科での広く浅くという特色も必要なのかもしれないが、多くの中学生はそこを求めていないように思う。それよりも、特化した職業学科の方が、子どもた

ちは頑張れるのではないか。地域の実情を含みながら、いかに関わっていくかという方向性も重要である。

- たとえば亀岡市では、市をあげて魅力あるまちづくりに取り組んでおり、Uターン人口が増えるよう企業も協力的である。取組の結果、ここ数年転入者が増えてきている。義務教育の現場においても、キャリア教育に力を入れている。市内で働いている様々な職業の方を学校に招いて、子どもたちがその中で希望する職種の話を知るといいう取組がある。子どもたちは、地域にどのような職業があるのか理解を深めることができ、その職業に就くにはどうすればよいのかと考える機会にもなる。子どもたちが社会を見る、社会を知るといことは非常に重要なことである。このような経験が、将来の高校選択にも繋がっていくと考える。
- 亀岡市の小・中学校は、非常に大きな規模の学校と小さな規模の学校とが混在している。小さな学校では、オンラインを使った授業を充実させるなどの取組をしている。また、小規模校での学びを希望する者もいる。しかし、今年度末で閉校する学校があったり、複数の学校を合併して義務教育学校をつくったりしていくなど、統廃合の動きがある。地域の方々には様々な思いがあるだろうが、喫緊の課題である学校の活性化に向けて、取組が進められている。
- 中学生たち全員が、たとえばIT企業などで仕事をするタイプの適性を持っているわけではない。中学校教員は、それぞれの生徒が将来本当に幸せな人生を送っていくために、どうしてやってやるのがよいのかを考えながら、進路指導などを行っている。もの作りに向いている生徒をとっても、いわゆる職人気質でこだわりのもの作りをするようなタイプの子もいれば、コツコツと作業をする方が得意な子もいる。生徒それぞれの特性や興味・関心などを見ているが、進路を考えると、高校の普通科に進み大学へ行って企業に就職していくというようなストーリーを、保護者の方が描いておられる場合には、ミスマッチを感じることもある。専門教育・職業学科を勧めたいような生徒も多くいるので、保護者への啓発も必要な要素である。
- これからの農業の魅力や、本当に儲かる農業はこのようなものだといった農業を通じた夢が、中学校教員や中学生たちには十分に伝わっていない。それぞれの職業学科が目指す教育の夢を語るような場が、中学校教員、中学生や保護者向けにあれば、非常に有効であると考えられる。
- 将来どうなりたいかという夢は、中学校段階では子どもも保護者もなかなか決めきれない。早い段階から、どのような職業があるか、どういった高校・学科に進めばこういう就職に繋がるのかといったことを聞く機会があれば、高校選択の状況も変わってくるのではないかと。本当は専門教育の適性があるのではないかと思っても、しっかりした夢がなければ、保護者としてはやはり普通科に進んで大学に行ってからといった思いになってしまう。
- 職業学科での学びがどのようなビジネスと繋がるかや、収入面などの具体的な内容は、案外子どもたちも理解しやすいと思う。将来を見据えた話を、中学生や保護者に示してほしい。
- ◆学校は、規模が小さくなりすぎると確かに活気がなくなっていく。しかし、地域実態も踏まえ

ていくと、大きいからよい、小さいから駄目だという議論には必ずしもならない。どのように連携して、ネットワークをつくっていくのかを検討するヒントも、今日の議論の中にはあったと思う。次回は、京都府の地域性を踏まえた学校の在り方について、規模感や学校数等々も踏めて議論していきたい。

- 本日していただいた議論においては、学校教育の段階において、単に職業を知るという知識のキャリア教育ではなく、どう生きていくのかということを考えさせるキャリア教育が必要だということが、1つの柱であったととらえている。そういう視点で、これからの学校教育で身につけてもらいたい力というものを考えると、学力、社会性、専門性、協調性など、様々な力があると思う。そうした力を身につけさせられる教育を進めていくために、学校の規模や中身などをどうしていけばよいかということ、府内の地域性も踏まえて、次回議論していただきたい。